

恋姫†鹿蜻

えなとん

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

何年か前に違うアカウントで投稿していたのですがぼすわーど忘れてしまったので

こちらで新しい小説を書いていこうと思います

リハビリがてらになりますので読みにくいかもしれませんがご注意ください。

誤字脱字等教えていただけると嬉しいです

0 話「転生」

目次

1

0話「転生」

私はどうやら死んだようだ

社会人だった私は初めての会社への就職を遂げたが

そこは世間で言うブラックのようだった。

毎日残業休みは月2日で他人から見ればバカだと言われるだろう。

実際友達からも「辞めたほうがいい」と何度も言われていた。

でもやめられなかった・・・上司に辞表をだしにいけば「もう少しいてくれないか」と

言われ断れない性格だった私はそのまま働いていた。

そんな状況が続きある日会社で夜遅くにパソコンを使い仕事をしていたら突然倒れたらしい。そしてそのまま過労死だ。

独身で彼女もない、ただ親に悲しい思いをさせてしまった・・・それだけが心残りだ。

これらのことを

目の前にいる真っ白なじいさんから聞いた。

自分で神だと言っていた。周りは真っ白な空間で何も無い

あるのは机とイスだけ、こんな所地球ではないだろう。

そんなことでその神に話を聞き今に至る

「それで私はどうなるんだ？このまま天国行きか？」

「うーむそれなんじやが、ちよいとわしの遊びに付き合ってもらえんか？」

満面な笑みをしたじいさんが楽しそうに提案してきた

「遊び？どういうことだ？」

「そうじやな、お主が知っているかどうかかわからぬのだがある世界に行つて欲しい

のだ恋姫無双というゲームはしっておるか？アニメにもなったんじやが」

知っている、会社の隣に座っていた同僚が好きで夜遅く帰って徹夜

でそのゲームを

していると知ったとき奴の体力はどうなっているんだと疑ったもんだ

休憩中にまでその物語やら好きな子のことを毎日語っていたため私も覚える気がなくても覚えてしまった。

そのゲームは三国志の有名な人物たちを女性にしそこに現代から突然やってくる主人公がその女の子たちと一緒に乱世を生きていく物語だったはずだ。

いわゆるハーレムというやつだな

ルートは魏蜀呉に分かれていてそれぞれ違う物語になる。

しかし間違えても三国志の時代、戦争もあるし盗賊もいる。

そんな時代で生きていける自信がない

「ゲームは知っている、だがそのゲームがどうしたんだ？」

「いや一度は聞いたことがあるじやろうが、転生というやつをしてほしいのじや

転生というか転移じやな」

「多分その話からすると元の世界へは戻れないんだろう？それなら構わないが

その時代を生きていける気がしないんだが……」

「そうじやな……一度死んだ世界へは戻れない……すまぬ……」

そのままその世界に放り出すことはない安心せい！そこはわしからいろいろプレ

ゼントするぞ！」

そういうと神は笑みを浮かべながら手を振りかざす

「おぬし学生の頃から無双系のゲーム好きじやったろ？あのキャラクターの

能力を付加しようと思うんじや、そうすればある程度は死なないじやろう」

「ああ社会人になってからは忙しくてなかなかできなかつたが好きだったぞ

三国も戦国もな、その能力は有難いのだがそれは鍛錬を積みめば
どんどん強くなつていくということか?」

「いや最初からゲームでいうMAXの状態じゃな、動き方等は
身体に覚えさせておく、どのキャラクターになるかはお楽しみじゃ
!」

「そうか、すぐ死なないのであればなんでもいいさ。

だが一つ聞きたいなぜ私だったんだ?」

笑みを浮かべていた神の表情が少し暗くなる。

「そうじゃな・・・おぬしを見つけたのは本当に偶然だったんじゃ。

だがその人生働くことだけで幸せではなかったじゃろう?」

だから今度の人生少しでも楽しんでもらおうと思っただけじゃ

本当に偶々だったんじゃぞ?」

「ということは私は運がよかつたんだな」

「言つてしまえばそういうことじゃな、さてそろそろ転移してもら
うかの

実は長くこの空間にお主がいるのはまずいんじゃ・・・

自我が崩壊してしまうからの・・・」

(自我が崩壊とは・・・早くいつてもらいたかつたな・・・)

「そうか・・・じゃあ転移を頼む」

「よしわかつた! 転移した後のことじゃがお主の好きに生きるがよい
!

二度目の人生じゃしつかり生きるのじゃぞ?」

そう言つて目の前が真っ白になる。

二度目の人生か・・・せつかくもらつたんだ、しつかり楽しもう
と密かに思った・・・。

・
・
・
・
・
・
・
・
・
・

「行っただか・・・」

今程行っただ若者は目が死んでおっただ

亡くなっただ原因が働きすぎとは・・・。

今度は気楽に生きてほしいものじやな

「さてと・・・あやつのが能力・・・

おお！そういえば容姿ももう少しかっこよくしてやるかの！

ゲームの主人公もいるわけじやし、負けてられないしの

フオツフオツフオ

先ほど話をしていた真面目な性格ではなくただのおちやられたじじいに

変わった瞬間である。

「能力の方はいいようじやな・・・ふう・・・

次は容姿じやな、よしここをk・・・ガチャ！バンツ！！うわああああ

あああ！！

だ、誰じや！」

「失礼いたします、面接の方はやっただ終わりましたか？

とても長かったように思いましたか？」

「ああ・・・お前さんか・・・ってああああああああ！！

性別まで変わってしまったとるうううう！！？

ど、どうするんじや・・・もう決定してしまっただ・・・あわわわわ

すまぬ・・・%#\$#よ・・・元気にいきってくれっ！！」

見えもしない空を見上げ転移してしまっただ主人公を憂う神であっただ。